

おわりに

編集を終え一息ついた。本刊を通して読んでみると実に面白い。それが何故かと改めて考えてみるとなるほど、気管支鏡好きの集まりによる渾身のメッセージだからに他ならない。

2020年、新型コロナウイルス感染症が世界を席卷した。気管支鏡はエアロゾル発生の原因になるからと自粛するよう通達され、気管支鏡好きにとっては脅威でしかなかった。その中、各執筆の先生方に本刊の原稿作成に当たって頂いた。おそらく現場では新型コロナウイルス患者の診療に当たりながら、気管支鏡自体が必要とされなくなるのではないか、など色々と感じるところがあったと思う。しかし小生のそのような不安を微塵とも感じさせない執筆の先生方のゆるぎない決意を感じることで感謝の言葉しかない。

呼吸器内視鏡は消化器内視鏡に比べ未成熟であることは否めない。しかし、だからこそ面白いわけである。本刊の刊行にあたり編集の出雲雄大先生と取り決めたことがある。それは普通の教科書に載っていない事を優先的に載せようと。独創的な内容も含んでいるかもしれないが、あらゆる進化の過程でこれは必ず通らなければならない道である。ただし同時に先達の教えに原点回帰することも大変重要な点である。このように過去と未来を行ったり来たりしながら、患者にとって本当の意味で有益な技術や知見が生まれてくると信じている。

2021年3月吉日

東京都済生会中央病院 呼吸器内科
笹田 真滋